



世界文学全集 38

---

ロレンス  
息子と恋人

---

伊藤 整 訳

河出書房新社

世界文学全集 38 ロレンス



© 1964

編集委員

阿部知二 伊藤 整  
桑原武夫 手塚富雄  
中島健蔵

---

昭和35年2月28日 初版発行

昭和39年4月20日 15版発行

定価 350円

訳者 伊藤 整  
発行者 河出 孝雄  
印刷者 大場 重雄  
装幀 原 弘

印刷：有限会社恵春堂印刷所  
製本：中西製本株式会社  
本文用紙：日本製紙株式会社  
同納入：東邦紙業株式会社  
クロス：東洋クロス株式会社  
同納入：株式会社石綿商店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社  
神田小川町三の八

電話東京(291)3721~7  
振替口座 東京10802

---

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

息子と恋人

第一部

- 第一章 モレル夫妻の結婚生活の初期……………三  
第二章 ポールの誕生と新しい争い……………三  
第三章 モレルをあきらめウィリアムに執心する……………三  
第四章 若いポールの生活……………三  
第五章 ポールが人生に乗り出す……………三  
第六章 家族の中の死……………三

第二部

- 第七章 少年と少女の愛……………一五  
第八章 愛の戦い……………二〇三

息子と恋人

## 主要人物

ウォルター・モレル 教養はないが美男の炭坑夫。妻との不和から大酒飲みとなり、ついに妻子にうとまれて孤独な暮らしをする。

ガートルード・モレル ウォルターの妻。良家の出で、教養ある女性。

粗野な夫との結婚を後悔し、長男ウィリアムと次男ポールの成育へそそぐ異常な情熱のうちに生きがいを見いだそうとする。

ウィリアム・モレル 秀才の長男。ロンドンの船会社に勤めていたが、結婚を前にして丹毒のため急死する。

アニー・モレル 長女。補修学校の教師。レオナードと結婚。

ポール・モレル 次男。絵を書くことの好きな芸術家肌の青年。兄の死後、母の愛情を一身に集め、彼もまた母を熱愛する。少女ミリアムの精神的な愛情にあきたらず、人妻クララと深い仲になる。

アーサー・モレル 三男。父親似で美男。粗野で衝動的な性格の青年。ミリアム・リーヴァーズ ロマンチックな清純な娘。ポールを深く愛しているが、その愛情があまりにも精神的であるため、ポールを失う。クララ バクスター・ドーズの妻。夫と別居して、ポールと同じ会社に働いているうちに、年下のポールと恋仲になる。

バクスター・ドーズ クララの夫。金属工。妻と別居後、すさんだ生活をしているが、妻の愛人ポールと奇妙な友情を持ちあう。

## 第 一 部

## 第一章 モレル夫妻の結婚生活の初期

ボタムズ住宅は、もと、ヘル・ロー部落のあったところに建った。ヘル・ローというのは、グリーンヒル・レインの小川の傍にあるふくらんだ藁葺きの家の集まりだった。ここに住んでいた坑夫たちは、野原を二つ越えたところにある引き上げ機を使う炭坑で働いていた。小さな炭坑なので、小川はそのため汚されることもなく、赤楊はくの末の下を流れていた。輪になって、ものうげにとほとほと引き上げ機のまわりをめぐるろばによって、これらの炭坑の石炭は地上に引き上げられた。この地方一帯に、これと同じような炭坑があった。そのうちのいくつかは、チャールズ二世の時代から掘られていて、少数の坑夫とろばが、蟻ありのように地面に穴を掘り、麦畑や牧場の中に奇妙な堆積と小さな黒ずんだ場所を作っていた。これらの坑夫の小屋は、あちらこちらに、塊かたまりになったり、並んだりして、教区の中に散らばっている小さな

農家や靴くつ下製造業者たちの家とともに、ベストウッド村をかたちづくっていた。

その後、六十年ほど前に、とつぜん変化が起こった。引き上げ機掘りの炭坑は、資本家たちの大きな炭坑のために押しやられてしまった。ノッチングムシャーとダービーシャーに炭田と鉄鉞脈が発見され、カーストン・ウエイト会社が出現したのだ。わき立つような騒ぎの中で、パーマーストン卿は、彼の会社の最初の炭坑を、シヤールウッド・フォレストのはずれにあるスピニー・パークに開いた。

この時代に、老旧化するにつれて、かんばしからぬ評判で知られていたヘル・ロー部落は焼き払われ、大量の廃棄物はきれいに片づけられた。

カーストン・ウエイト会社はうまく掘りあてたことがわかった。そこで、セルビーとナットールから小川の谷沿いに下の方へ、新しい炭坑が作られ、まもなく六つの炭坑が仕事を始めていた。ナットールから鉄道が敷設された。それは、森の中の砂岩の台地の上を走り、廃墟となったカルトゥッジオ会の修道院や、ロビンフッドの泉を通り、スピニー・パークへ下り、そこから麦畑にかこまれた大きな炭坑なるミントンに達した。ミントンから谷の斜面の農業地帯を通り抜けてバンカーズ・ヒルへ行き、ここで支線を出し、それから北へ走って、クリッチ

とダービーシャーの丘陵地帯を見おろすベガリーとセルビーまで延びていた。

この地方に打ち込まれた黒い鉄ともいふべき六つの炭坑は、細い鎖の輪なる鉄道によってたがいに結びつけられた。

大勢の坑夫を住まわすために、カーストン・ウェイト会社はベストウッドの丘の中腹にいくつかの広大な住宅を四角形に建てた。これがスクエアズである。その次に、ヘル・ローのあった小川のある谷間にボタムズを建てたのだ。ボタムズには六つの建物があつた。それは三つずつ、二列に並んでいて、ドミノのブランク・シックスに似ていた。そして、それぞれの建物には十二の家族が住んでいた。この二列になった住宅はベストウッドのかなり急な斜面の下にあつて、少なくとも屋根裏の窓からは、セルビーのほうへゆるやかに上つて行く谷の向かいの斜面を見わたすことができた。

これらの建物はどっしりと、たいへん上品に見えた。

この一画をひとまわりすると、下側の建物の陰の小さな前庭には、黄色い桜草やゆきのした草が見られ、日当たりのよい上のほうの建物のまわりには、アメリカなでしこや石竹が見られる。また、小ぎれいな表窓、小さなポーチ、小さな水蠟樹の生垣、屋根裏部屋の明かり取り窓が見える。しかし、それは外側のことである。坑夫の女房

たちの生活場所でない客間の辺までの光景である。彼女らの居間である台所は家の裏側にあつて、隣の建物と向かい合いになっており、みすばらしい裏庭と灰捨て穴が見えるのだった。二列の建物と灰捨て穴の長い列にはさまれて道が通っており、ここで子供たちは遊び、女たちは世間話をし、男たちはたばこをふかした。そのため、きちんと建てられ、りっぱに見えるボタムズの実際の生活状態は、その住人が台所で生活しなければならぬし、また台所は灰捨て穴のある汚い道路に面しているために、かんばしからぬものだった。

モレル夫人はボタムズへ引越すことにあまり気乗りがしなかった。彼女がベストウッドからボタムズへ移つたころには、この住宅は建てられてからすでに十二年もたち、薄汚くなりはじめていた。しかし、それでも一ばんうまきいったほうだったのだ。その上、彼女は一ばん高い場所の建物の一ばん端に住んだ。したがって彼女の家は一方にしか隣がなく、反対側には余分な小さい庭がついていた。彼女の家は長屋の端にあつたので、他の、両側に隣のある家に住む女たちにたいして、一種の貴族的感情をいだくことができた。それは、彼女の家賃は週五シリング六ペンスで、他の人々の払う五シリングより高かったからだ。しかし、この住居の優越感モレル夫人にはあまり慰めにならなかつた。



彼女は三十一歳で、結婚してから八年目だった。小柄で、ほっそりしたからだつきだが、しっかりした態度の女であった。けれども、彼女は、ボタムズの女たちと交際を始める時にくらか気おくれを感じた。越して来たのは七月だったが、九月には三人目の赤ん坊が生まれようとしていた。

彼女の夫は坑夫だった。彼らが新しくここに家庭を作り始めてまだ三週間しかたたぬころ、教会の記念祭の市の日が始まった。彼女はモレルがその日にはきつと休むだろうと思っていた。彼は祭りの、日曜の朝早く出かけて行った。ふたりの子供はすっかり興奮していた。七歳だったウィリアムは朝食が終わると、五歳の妹のアニーを残したまま、すぐ外へとび出して行き、お祭りの行なわれている場所をうろつき歩いた。妹のほうは、私も行きたいと言って午前ちゅう泣いていた。モレル夫人は自分の仕事をしていた。彼女はまだ近所の人たちをほとんど知らなかった。この小さな娘をだれにあずければいいのかわからなかった。そのため、彼女は娘に、昼御飯のあとでお祭りに連れて行ってあげると約束した。

ウィリアムは十二時半に帰って来た。彼は非常に活発な子供だった。彼の髪の毛は金髪で、ちよつとデンマーク人かノルウェー人に似たところがあつた。

「昼御飯できている？」と彼は帽子をかぶつたままで叫

んだ。「お祭りは一時半に始まるんだもの。そう言うていたよ」

「できたらすぐ食べさせてあげるわ」と母親は答えた。

「まだできていないの」と彼は怒って、青い目でじつと母親を見つめた。

「じゃ、ぼく、ご飯食べないで行くよ」

「そんなこととしてはだめよ。五分でできるから。まだ十二時半ですよ」

「もう始まっちゃうよ」少年は泣きそうになつて叫んだ。

「始まつたつて、あんたが死んじやうわけでなし、おまけにまだ十二時半よ。まだ一時間はたつぷりあるわ」と母は言った。

少年は急いでテーブルの支度を手伝い、三人はすぐ食事を始めた。彼らがジャムつきのバター・プディングを食べていたとき、少年はとつぜん椅子からとび上がり、立ったままじつと動かずに耳を傾けた。まわり始めたメリーゴーラウンドの小さなきしむ音と、ラッパの音が遠くから聞こえてきた。母親に向けた彼の顔はふるえていた。

「だから言ったじゃないか」と帽子をとり衣装戸だなのところへかけ出しながら彼は言った。

「プディングを持って行きなさい——けどまだ一時五

分よ、だからあんたの思い違いだわ——まだ二ペンスあげてなかつたわね」と母親が続げざまに言った。

少年はひどくがっかりしながら、二ペンスを取りにもどつて来た。そして、ものも言わずに出て行つた。

「あたしも行く、あたしも行く」とアニーは言つて泣きだした。

「そう、じゃあんたも連れてつてあげるわ。泣き虫のおちびさん」と母親は言つた。

午後になると彼女は娘の手をひいて、高い生垣の下をゆつくり歩いて丘に登つて行つた。野原の乾草は集められたあとで、牛が刈り取つたあとに生えた草を喰んでゐた。暖かい平和な日だつた。

モレル夫人は祭りは好きではなかつた。メリーゴーラウンドは二組あつた。一組は蒸気で動くもので、一組は小馬に引かれてぐるぐる回つてゐた。三つの手回しオルガンが鳴つていて、不揃いなピストルの音や、やしの実売りの恐ろしい金切り声、パイプ落とし屋の叫び声、のぞきからくり屋の女の金切り声などがそれにまじつて聞こえてきた。モレル夫人は、息子がライオン・ウオレスの掛け小屋の外側について、黒人をひとり殺し、ふたりの白人を不具にした有名なライオンの絵を恍惚としてながめているのを見つけた。彼女は彼をそのままにしておいて、アニーのために砂糖菓子を一箱買いに行った。まも

なく息子がひどく興奮して彼女のところにやつて来た。

「お母さんは来るって言わなかつたじゃない——いろんなものがあるだろう——あのライオンは三人殺したんだよ——二ペンスつかつちやつた——ほら」

彼はポケットから、もも色のこけばら模様のついたゆで卵いれのカップを二つひつぱり出した。

「ほく、これをあそこの、おはじきを穴に入れて取る店にとつたんだ。二度やつて二つ取つた——一回が一ペニーさ——ほらこれにはこけばら模様ががついてるだろ、見てごらん、これがほしかったのさ」

息子がそれをほしがつたのは、母親にカップをやりたかつたからなのだと思つた。母親は気がついた。

「まあ」と彼女は喜んで言つた。「きれいだわ」

「それ持つててね。ほく、こわすといけないから」

彼は母親が来たのに興奮しており、彼女を引っぱつて、祭りをあちこち見せて歩いた。そのうちに、のぞきからくり屋のところ、彼女が並んでゐる絵を一つの話にして聞かせると、彼は魅せられたように聞き入つた。彼は母親から離れようとしなかつた。

彼は、子供っぽい気持ちで彼女を誇りに思い、片時も母親から離れなかつた。小さな黒い帽子をかぶり、上着を着た彼女ほど淑女らしく見える女はひとりもいなかった。彼女は、知っている女に会うとほおんであいさつ

した。彼女は疲れたので、息子に言った。

「ねえ、もう帰るの？ それともまだいる？」

「もう帰るの？」と彼は母を難ずるような顔で叫んだ。

「もう、っっていうても、四時なのよ」

「もう何かご用があるの？」と彼は悲しそうだった。

「帰りたいくなければ、あんたはまだいてもいいわ」と彼女は言った。そして、彼女は小さな娘を連れてゆっくりむこうへ行ってしまった。息子は、母が行ってしまうのを身を切られるように見つめながら立っていたが、それでも祭りから帰ることができなかった。彼女が月星亭の前の空地を横切ろうとしたとき、中から男たちの叫び声やピールのにおいがしてきた。彼女は自分の夫がたぶんそこにいるのだと思って少し足を早めた。

六時半ごろ、息子は疲れて、すこし青い顔をし、なんとなくみじめな様子で帰って来た。彼は、自分ではわからなかったのだが、母といっしょに帰らなかったために気分が悪くなっていたのだ。母が帰ってしまったから、祭りはすこしもおもしろくなかった。

「お父さんは帰って来た？」と彼は尋ねた。

「いいえ」と母親は答えた。

「月星亭で給仕を手伝っていたよ。窓に張ってある、穴のあいている黒いブリキの間から、腕まくりしているのが見えたもの」

「え！」と母親は短い叫び声を出した。「お金を持っているのよ。酒手をいくらからもらえば満足するんだわ。収入のほうはどうあろうともね」

夕方薄暗くなると、モレル夫人は縫い物もできなくなり、立ち上がって戸口のほうに行った。興奮のどよめき、祭日の落ちつきなさがあたりを満ちていて、彼女もようやく祭りの気分にはじけた。彼女は外へ出て横庭にはいつて行った。女たちが祭りから帰って来るころだった。子供たちは足のところを青く染めた小羊や、木で作った馬を抱いていた。ときどき、飲めるだけ飲んで、ふらついた男が、よろめきながら通って行った。ときには善良な夫が、家族といっしょに平和に歩いて来た。しかし、たいしては夫がついていず、女と子供だけだった。家に残っていた母親たちは、白い前掛けの下に腕を組み、夕やみの中で立ち話をしていた。

モレル夫人はひとりぼっちだったが、それには馴れていた。息子と小さな娘は二階で眠っていた。そのため、彼女は変化のない、安定した家庭を持っているように見えた。しかし、彼女はお腹の中にいる子供のことを思ってみじめな気持ちになった。世の中というものが荒涼としたものに思われた。彼女の生活には、今とちがったことは何も起こらないのだ——少なくとも、ウィリアムが大きくなるまでは。しかし、彼女にとっては——子

供たちが大きくなるまでは——このわびしい忍耐ということのほかに何もなかった。そして、子供のことを考えれば、彼女にはこの三番目の子供を育てる余裕はないのだ。彼女はこの子を生みたくなかった。父親のほうは、酒場でビールを給仕しながら、自分も飲んだくれていた。彼女は夫を軽蔑したが、彼から離れることもできないでいた。この生まれて来る子供が彼女にとって重荷であった。ウィリアムとアニーのためでなかったら、彼女は貧乏と醜<sup>みにく</sup>さと卑<sup>いや</sup>しさにこれ以上がまんできなかつたらう。

彼女は外へ出ることもいやなほど重い気持ちになっていたが、家の中にいることもできず、前庭へ出て行った。暑<sup>あつ</sup>さで窒息<sup>あせ</sup>しそうだった。これから先の自分の人生を考えると、彼女は生き埋めになったような気持ちがした。小さな前庭は水蠟<sup>いぼ</sup>樹<sup>かき</sup>の生垣<sup>せいげん</sup>で、四角くかこまれていた。

彼女は花の香を嗅ぎ、暮れかかる美しい夕景を見て心をしずめようと、前庭に立っていた。庭の小さな門の反対側に、燃えるように輝いている刈り取りを終えた牧場の間を、高い生垣の下を通過して丘を登って行く道へ出る木戸があった。

頭上の空は夕焼けが高鳴り、脈打っているようであった。夕映えは牧場から急速に消えてしまい、地面と生垣は夕やみの中にくすんでいた。暗くなると、丘の頂上が

赤く、ぎらぎら輝いて見え、その輝きは祭りの騒ぎの名残りを伝えていた。

ときどき、生垣<sup>せいげん</sup>の下の道のくらがりを通過して、男が千鳥足<sup>ちどりあし</sup>で家をめざして歩いて行った。ひとりの若い男が丘のすその、小さな急な坂で駆け足になり、その木戸に衝突した。モレル夫人は身ぶるいした。その男はまるで、木戸が彼を傷つけようとしたかのように口ぎたなく、また悲しそうに毒づきながら起き上がった。

彼女は、物事<sup>ものごと</sup>ってすっかり変わってしまうことなんてないのかしら、と思ひながら家の中には行って行った。はいつてみると、自分の生活が変わってしまったことはないのがはっきりわかった。少女時代を考えると、それはるか昔のことに思われた。ポタムズの裏庭を重い足で登って行く自分と、十年前にシアネスの防波堤の上を軽々と走っていた自分が同じ人間なのだろうかと思つた。

「いったい、どうしたらいいのかしら？」と彼女はひとりごとを言った。

「こういうことは、どうすればいいのかしら？ これから生まれる子供のことにしても。自分のことは考えに入れたことってないみたいだわ」

しばしば、生活というものは、ある人間をつかんで、その人間をからだごとと運んでゆき、その人間の経歴を作

り上げるが、しかもなおそれは眞の経歴でなくて、その人間を隠蔽いんぺいされたままにしておくことがある。

「わたしは待つている」とモレル夫人はひとりごとを言った。「待つているけれど、わたしの待つているものが来ることは決してない」

そこで彼女は台所を片づけ、ランプに灯をつけ、炬たきの火をなおし、翌日の洗濯物を見つけてそれを水に浸した。これらの仕事をしてから、彼女はすわって縫い物を始めた。彼女の針は、何時間ものあいだ布地を縫って規則正しく光っていた。ときどき、彼女は仕事の手を休めてため息をついた。また、縫い物をしている間じゅう、子供たちのためにどうすれば手持ちのものを一ばんうまく利用できるだろうか、と考えていた。

十一時半に夫が帰って来た。彼のほおの黒い口ひげから上のあたりは非常に赤く、てらてら光っていた。

彼ははいって来て軽くうなずいた。彼は上ぎげんだった。

「おおっと、おれを待っててくれたのか、かあちゃん。アンソニーのところを手伝ってたんだ。あいつがいくらくれたと思う。しみったれた半クラウンだけさ、それっきりよ——」

「あとは、あんたがビールで飲んだことにしたんでしょ」と彼女は短く答えた。

「飲まないよ——飲まないよ。ほんとうの話だ。今日はほんのちょっとしか飲まないよ。全くなんだ」彼の声は優しくなってきた。「ほら、おまえにしよ、うが、入りビスケットを少しばかりと、子供たちにやしの実を持って来たぞ」彼はしよ、うが、入りパンと毛だらけのやしの実をテーブルの上に置いた。「おまえはまだ一度も、ありがとって言ったことはないな。そうだろう？」

彼女は折れて出て、やしの実を取り上げ、中に汁があるかどうか調べるために振ってみた。

「それはいい品だよ。絶対にそうだ。賭けをしてもいいよ。ビル・ボジキソンから貰ったんだ。『ビル』っておれは言ったんだ。『おまえは三つもいらぬいな、いらぬいな。おれの息子と娘に一つくれないか？』『いいとも、ウォルター。どれでもいいのを持って行きな』って、やつは言ったんだ。それでおれは一つ貰って礼を言った。おれはあいつの目の前で振ってみるのを遠慮したらぬ、『いいか悪いか振ってみな』って言うんだ。それでな、それがいいってわかったんだ。あいつはいいやつさ、ビル・ボジキソンはなあ。いいやつだよ」

「酔っぱらうとだれでも気まえばよくなるのよ。それに、あんたは、あの人といっしょに酔っぱらっていたんでしょ」とモレル夫人は言った。

「なに、このくそ女、だれが酔っぱらっている。知りた

いもんだよ」とモレルは言った。

彼は月星亭で、一日じゅう給仕を手伝ったことで上ぎげんだった。彼はしゃべりつづけた。

モレル夫人はひどく疲れていたし、彼のおしゃべりが苦痛だったので、彼が火をかき起こしている間に、さつさと寝に行ってしまった。

モレル夫人は、ハッチンソン大佐(ジョン・ハッチンソン、一世に反逆した宗)と共に、非国教の組合教会主義のために戦って、その後もしっかりした組合教会派として残ったところの名の知られた市民の家庭に生まれた。彼女の祖父は、ノッチンガムでたくさんのレース製造業者が没落したときに、レース売買に失敗して破産した。彼女の父、ジョージ・カパードは技師だった。背の高い、高慢な美男子で、自分の美しい肌と青い目を誇りにしていたが、それ以上に誇りにしていたのは自己の誠実さだった。

ガートルードの背の低いのは母親似だった。しかし、彼女の誇り高い、不屈の精神はカパード家から受け継いだものであった。

ジョージ・カパードは自分の貧しさをひどく苦にしていた。彼はシアネスの造船所の技師の主任になった。モレル夫人——ガートルード——は彼の次女だった。彼女は母親が好きで、だれよりも母親を愛していた。しかし、彼女はカパード家の、澄んだ、挑戦的な青い目と、

秀でた額を持っていた。彼女は、柔和で、ユーモラスで、心の優しい母親にたいする、父親の傲慢な態度を憎らしく思ったことを今も忘れなかった。彼女はシアネスの防波堤の上を走ったり、船を見つけたりしたことを忘れなかった。彼女は、造船所に行ったとき、いきしゃで自尊心を持っていたために、だれからもかわいがられ、ほめられたことを忘れなかった。彼女は私立学校を経営しているおもしろい老夫人のことを忘れなかった。彼女はその夫人の助手になったのだが、その私立学校の手伝いをするのが好きだった。それから、彼女はジョン・フイルドがくれた聖書を今でも持っていた。十九のころ、彼女はいつもジョン・フイルドといっしょに教会から帰って来た。ロンドンで大学教育を受けたフイルドは、裕福な商人の息子で、実業界にはいろいろとしていた。

彼女はいつでも、九月のある日曜の午後のことを思い出した。そのときふたりは彼女の家の裏のぶどうの木の下にすわっていた。日の光が、ぶどうの葉を通して彼女と彼の上にこぼれ落ちて、レースの肩掛けのような美しい模様を作っていた。ぶどうの葉にはきれいな黄色になったものも何枚かまじっていて、それは黄色い、平らな花のようだった。

「じつとすわっててくれないか」と彼は言った。「きみ

の髪の毛は何に似てるといったらいいのかなあ。銅か金みたいに光っている。火に焼けた銅に似た赤さだ。日の光が当たっているとところは金の糸だ。なぜ皆は褐色だと言うのかなあ。きみのお母さんはねずみ色だなんて言うね」

彼女の目は彼のきらきらする目にぶつかつたが、彼女の心の中の高まりは、その清らかな顔にはほとんど現われていなかった。

「でもあなたは商売は好かないとおっしゃるのね」と彼女はきいた。

「きらいだな、大きらいだ」彼は激しく言った。

「そして、あなたは聖職につきたいっておっしゃったわね」と彼女は半ば懇願するように言った。

「そうしたいんだ。もしぼくが一流の説教師になる自信があれば、そうしたいんだ」

「じゃ、どうしてそうしないの……どうしてやってみないの？」と彼女ははげますように声を高めた。「わたしは男だったら、どんなことがあってもそうするんですけど」彼女はまっすぐに頭をあげた。彼は彼女の前ではすこし内気味だった。

「だけど、ぼくのおやじはとても頑固なんだ。おやじはぼくを実業界に入れようと決心しているんだから、きつと思いでおりにしてみましたよ」

「だけどあなたが男なら」と彼女は叫んだ。「男だということ、万事片づくわけじゃないさ」と彼は途方に暮れた頼りないしかめ面をした。

今では男というものがどんなものかもうくらか経験したし、ボタムズで、あちこち用事のために歩きまわつてみたので、男だということが万能のものではないことを彼女は知っていた。

二十歳のとき、彼女の健康上の理由でシアネスを去つた。彼女の父親は郷里のノッチンガムに退職してもどつたのだ。ジョン・フィールドの父は没落した。ジョンは教師になって、ノーウッドへ行ってしまった。彼女は、彼の消息をそれから二年後に思いきって手紙を出して知ることができた。彼は財産のある、四十歳の、下宿の女主人と結婚していた。そして、今でも、モレル夫人はジョン・フィールドの聖書を大切に託っておいた。今では彼女は、彼が何ごとができる人間だったとは信じていなかった。そうだ、彼女は、彼が何になれる人だったか、なれない人だったか今ではよくわかつていた。そうして、彼女は自分自身のために、彼の聖書をしまつておき、彼の思い出を完全に自分の胸の中に秘めておいた。死ぬまでの三十五年間、彼女は彼のことを口にしたことがなかった。二十三歳のとき、彼女はクリスマス・パーティーで、エアウオッシュ・ヴァレーから来たひとりの若者

に逢<sup>あ</sup>つた。モレルはその時二十七歳だった。彼は堂々とした体格で、姿勢は正しく、きりっとした男だった。彼は光沢のある縮れた髪と、一度も剃刀<sup>かみそり</sup>を当てたことのない、りっぱな黒いあごひげを持っていた。ほおは血色がよく、また彼がよく笑い、しかも心から笑うのでその赤い、濡れたくちびるは、目だった。彼は珍しくも、豊かな、響きわたる笑いをもっていた。ガートルード・カバードは彼に魅せられ、彼を見つめていた。彼はたいへん顔色がよく、また活気に満ちていた。彼はやすやすと滑稽<sup>ちやう</sup>なばかげたことを言つてのけた。彼は人みしりせず、だれとでも楽しくやつた。彼女の父親もユーモアの豊かな男だったが、それは皮肉なユーモアだった。この男のは違つていた。それは柔らかく、知的なところのない、あたたかな一種のばかぶさけだった。

彼女は彼と対照的だった。彼女の心は好奇心に富んだ受容型であつて、他人の話に耳を傾けるのが楽しみであり、また喜びであつた。彼女は他人に話をさせるの上手<sup>じょうず</sup>だった。彼女は考えることが好きだったので、知的だと人々に思われていた。何にもまして好きだったのは、教育のある男と、宗教や哲学や政治について話し合うことだった。その楽しみはたびたび得られるものでなかつた。それで、彼女はいつも人々に自分たちのことを話すようにさせ、そのことに自分の楽しみを求めていた。

彼女は小柄<sup>こがら</sup>で、ほっそりしていた。額は大きく、褐色の絹のような巻き毛が束になつて垂<sup>た</sup>れていた。彼女の青い目は人にまっすぐに向けられ、正直で、探求的であつた。彼女はカバード一族の美しい手を持っていた。彼女の着物はいつも地味だった。彼女は紺色の絹地<sup>きん</sup>に変わつた銀色の波形のひだで縁取りをした服を着ていた。それに、どっしりした、ねじれた形の金のブローチだけが彼女の装飾だった。彼女はまだ何ものにもそこなわれておらず、非常に敬虔<sup>けいけん</sup>で、美しい率直さに満ちていた。

ウォルター・モレルは彼女の前で魂を失つてしまったように見えた。この坑夫にとつて、彼女は神秘と魅惑そのものなる淑女だった。彼に話しかける彼女の言葉は、南部イングランドの発音であり、英語の粹<sup>すい</sup>であり、彼からだをぞくぞくさせた。彼女は彼をじつと見つめた。彼は上手に踊つた。それはまるで、彼のからだだが、踊ることを自然な楽しいことだと思つてゐるようだった。彼の祖父はフランスからの亡命者で、英国の酒場女と結婚したということであつた——もし、それが結婚といつてよいものならである。ガートルード・カバードはこの若い坑夫の踊るのを見つめた。彼の動作には魔力に似た一種の微妙な興奮があつた。そして彼のからだの花ともいふべき黒い髪の乱れかかった顔は、赤味をおびていて、どんな相手と踊るときも同じように相手の頭の上で笑つ



ていた。

「ちょっとすばらしい人だ。こういう人には今まで会ったことはない、と彼女は考えた。彼女にとっては、父親が男というものの原型であった。ジョージ・カバードは態度の堂々たる、眉目秀麗な、辛らつなところのある男だった。彼は神学書を読むのが好きだったが、身近な気持ちで愛読したのは使徒パウロひとりだけだった。彼は人使いではきびしく、人との交際では皮肉な態度をとった。彼はすべて、官能的な喜びは無視した。彼はこの坑夫とは非常に違っていた。」

「ガートルード自身、どちらかといえば踊りなどは軽蔑していた。彼女は踊りがうまくなりたいたなどは少しも望んだことはなく、ロジャー・ド・カペレー(伝統的なイギリスの踊り)すら習ったことがなかった。」

「彼女は父親のように高潔な清教徒であり、また、じつさい、厳格だった。そのため、思考や精神に捕えられて白熱する彼女の生き方とは異なり、肉体からろうそくの光のように流れ出す、この男のくすんだ金色の生命の炎の柔らかさは、彼女には何かすばらしいもの、彼女の及ばないもののように思われた。」

「彼は彼女のところにやってお辞儀をした。ぶどう酒を飲んだときのようなたかさが彼女のからだを貫いた。」

「いかがです、いっしょにこの音楽で踊りませんか」と彼はやさしく言った。「やさしいですよ。あなたの踊るのを見たくてしかたないんです」

「彼女は、前に、自分は踊れないと彼に言ったのだ。彼女は彼のいんぎんな態度を見て微笑した。彼女のほおえみはとても美しかった。それはこの男を感動させ、すべてを忘れさせた。」

「いいえ、わたしは踊りたくありません」と彼女は優しく言った。彼女の言葉は清らかに響きわたるように思われた。彼は、自分が何をしているか気づかぬまま——しばしば、彼は本能的に、的確な行動をした——彼女の傍にうやうやしく前かがみにすわった。」

「ですけれど、あなたは踊らなければいけませんよ」と彼女はとがめた。

「なあに、あの踊りはしたくないんです——あれは踊りたい曲じゃありませんから」

「でも、あなたは踊ろうと誘ったじゃないですか」

「彼はそれを聞くと心から笑った。」

「そいつは気がつきませんでした。あなたの前では気どつてもだめですな」

「こんどは彼女が吹き出した。『でもあなたは、何もかもまっすぐだというわけではありませぬわ』と彼女は言った。」